

ブロッコリーの需給動向

調査情報部

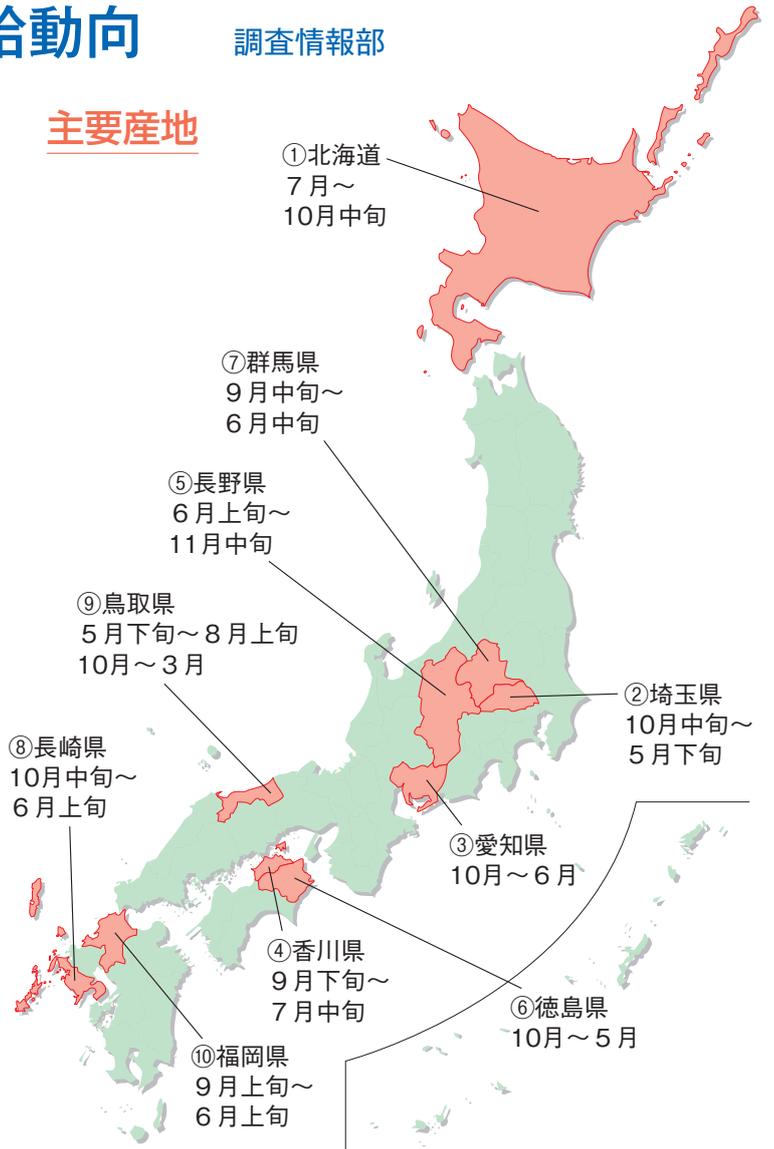
主要産地



ブロッコリー（北海道産）



ブロッコリー（長野産）



資料：農林水産省「平成26年産野菜生産出荷統計」

注：図中の番号は収穫量の多い順番、期間は主な出荷期間を表している。

ブロッコリーは、地中海沿岸原産の野生種ケールを起源とするアブラナ科の野菜で、つぼみの固まり（花蕾）と茎を食用とする。日本へは明治の初めに渡来したが普及せず、戦後の1970年代に、洋風化に伴って食卓に上るようになった。国民の栄養意識が高まった1980年代に入って、米国カリフォルニアからの輸入物などによって一年中出回るようになると、その栄養価が評価されて消費量が一気に伸びた。その後、国内産地も増え、予冷施設や冷蔵輸送が整うことで、国産ブロッコ

リーの周年供給体制が確立した。

ブロッコリーの生育温度は18～20度で、冷涼な気候を好む。そのため、6～8月に種子をまき、11月以降に収穫する夏まき秋冬どり栽培が主流だが、北海道、東北、長野などの高冷地では春まき夏どり栽培が、関東以南の暖地では夏まき冬春どり栽培が行われている。緑黄色野菜として需要は堅調であり、ブロッコリーの作付面積や出荷量は、増加傾向にある。

作付面積・出荷量・単収の推移

平成26年の作付面積は、1万4100ヘクタール（前年比102.9%）と、前年よりわずかに増加している。

上位5道県では、

- 北海道 2470ヘクタール（同102.5%）
- 埼玉県 1300ヘクタール（同102.4%）
- 愛知県 927ヘクタール（同100.4%）
- 香川県 902ヘクタール（同101.9%）
- 長野県 836ヘクタール（同101.3%）

となっている。

26年の出荷量は、13万400トン（前年比106.5%）と、前年よりかなりの程度増加した。

上位5道県では、

- 北海道 2万1700トン（同105.9%）
- 埼玉県 1万3800トン（同107.0%）
- 愛知県 1万3300トン（同 98.5%）
- 香川県 8750トン（同107.6%）
- 長野県 7280トン（同 99.6%）

となっている。

出荷量上位5道県について、10アール当たりの収量を見ると、愛知県の1.54トンが最も多く、次いで埼玉県の1.17トン、香川県の1.04トンと続いている。その他の府県で10アール当たりの収量が多いのは、大阪府（1.71トン）、静岡県（1.46トン）であり、全国平均（単純平均）は1.03トンとなっている。

作付面積の推移



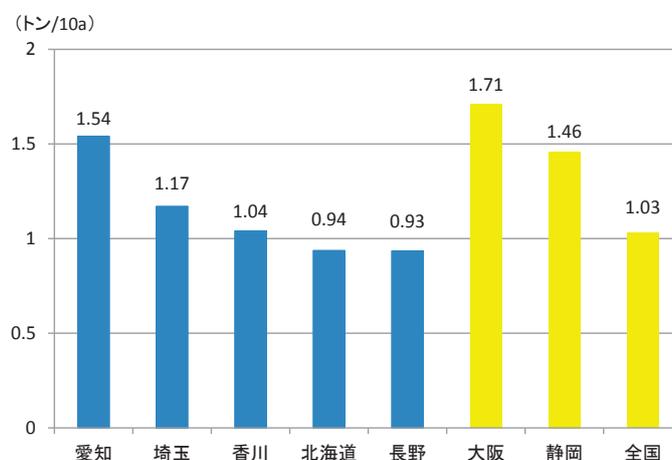
資料：農林水産省「平成26年産野菜生産出荷統計」

出荷量の推移



資料：農林水産省「平成26年産野菜生産出荷統計」

平成26年の主産地の単収



資料：農林水産省「平成26年産野菜生産出荷統計」

注：黄色は、単収が多い2県および全国平均。

作付けされている主な品種等

ブロッコリー産地は、早生種、中早生種、晩生種などの品種を使い分けたり、は種日をずらすことなどによって収穫期を分散させ、長期出荷を実現している。また各産地は、栽培環境などに合わせて秋冬どり栽培や夏どり栽培などの作型を選択している。こうした産

地間のリレー出荷により、国産ブロッコリーの周年供給体制は確立した。

比較的多くの産地で作付けされているおはようやサマードームは中早生種、晩緑99Wは晩生種である。

都道府県名 主な品種

北海道 ピクセル、おはよう、スターラウンド

埼玉県 おはよう、サマードーム、グラウンドーム

愛知県 ベルネ、ファイター、グリーンキャノン、むつみ、アーサー、^{おくみどり}晩緑99W

香川県 おはよう、クリア、SK7-096、晩緑99W

長野県 サマードーム、おはよう、SK9-099

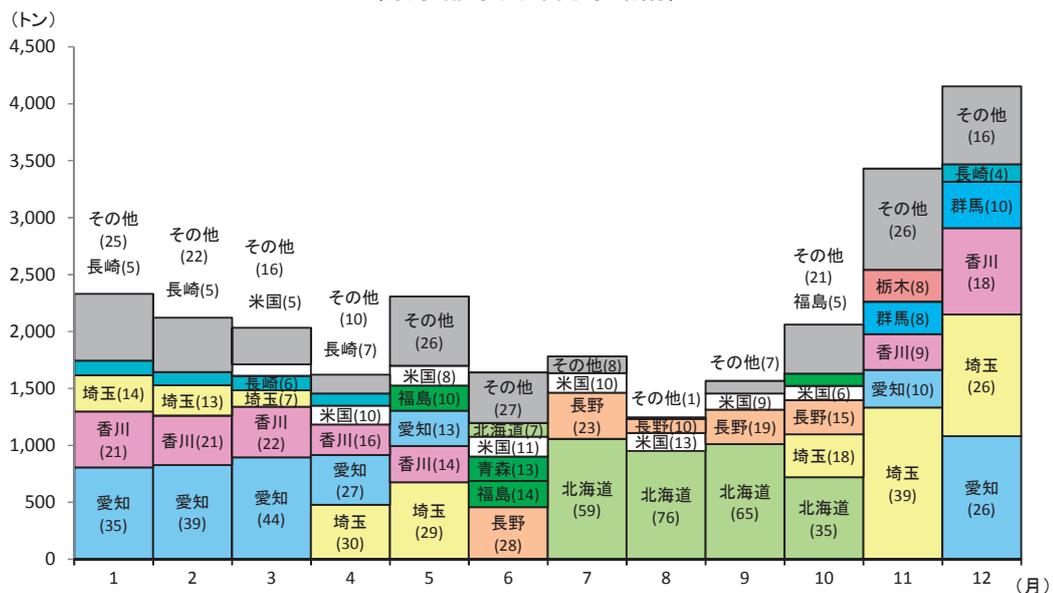
資料：農畜産業振興機構の関係者聞き取りによる。

東京都・大阪中央卸売市場における月別県別入荷実績

東京都中央卸売市場の月別入荷実績（平成27年）を見ると、11～12月に多いが、年間を通じて安定した入荷となっている。秋冬作と冬春作である11月から5月にかけては埼玉産、

愛知産および香川産の入荷が多い。夏作の6月から10月にかけては、北海道産および長野産の入荷が多くなっている。また、米国産はカリフォルニアなどから年間を通じて入荷される。

平成27年 ブロッコリーの月別入荷実績
(東京都中央卸売市場計)



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：平成27年東京都中央卸売市場年報）

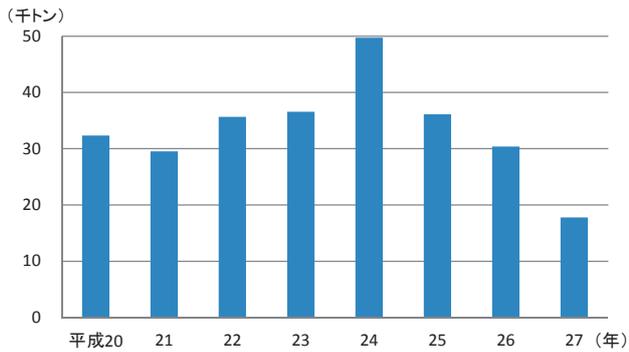
注：（ ）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（%）である。

輸入量の推移

生鮮ブロッコリーの輸入量は、平成24年をピークに減少傾向にあり、冷凍ブロッコリーの輸入量は、年を追って増加傾向にある。27年の輸入量を国別にみると、生鮮ブロッ

コリーでは米国（1万5422トン）が8割以上を占め、冷凍ブロッコリーでは中国（2万2056トン）とエクアドル（1万7634トン）とで9割以上を占めている。

ブロッコリー（生鮮） 輸入量の推移



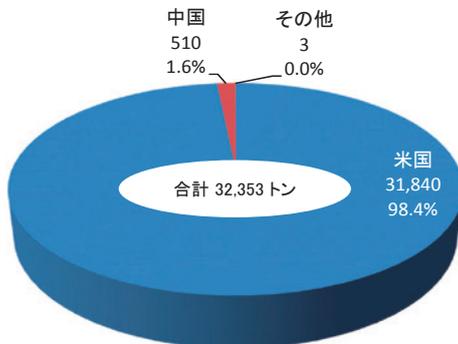
ブロッコリー（冷凍） 輸入量の推移



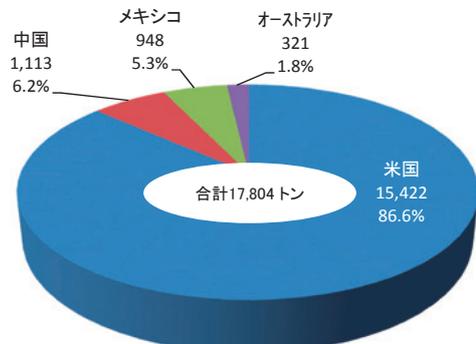
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

国別輸入量

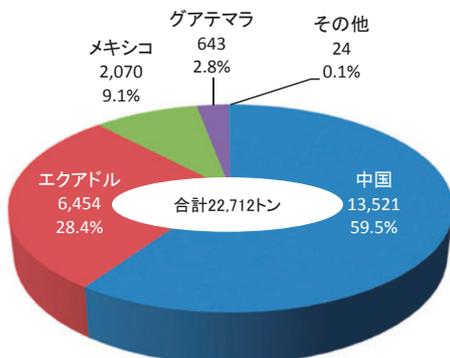
平成20年
ブロッコリー（生鮮）



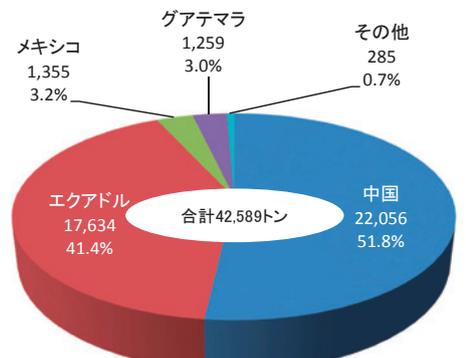
平成27年
ブロッコリー（生鮮）



平成20年
ブロッコリー（冷凍）



平成27年
ブロッコリー（冷凍）



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

消費の動向

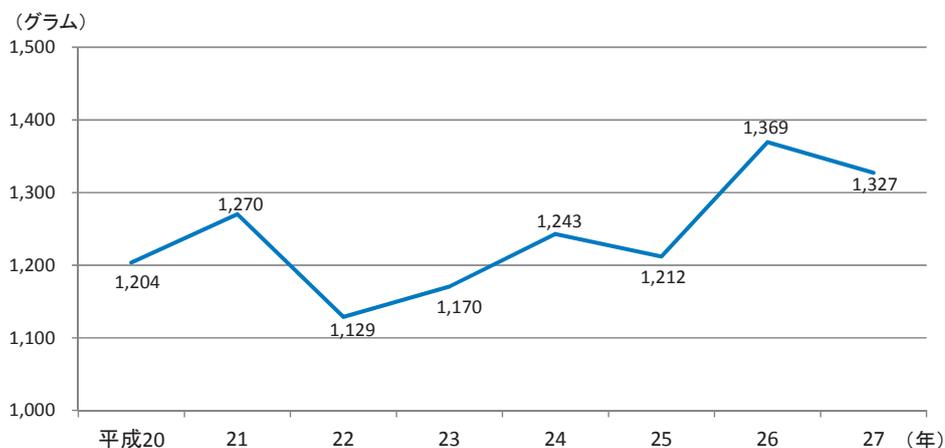
ブロッコリーは、さまざまな料理の主材料としてだけでなく、サラダの彩りや肉料理の付け合わせなどにも使える人気の高い野菜である。栄養価に優れた緑黄色野菜としての評価も高く、安定した需要を持っている。1人当たり年間購入量を見ると、平成26～27年は1300グラムを上回る推移となっている。

ブロッコリーは、ビタミンやミネラル、食物繊維などの栄養素を豊富に含んでいる。中

でも、疲労回復や美肌効果が期待できるビタミンCの含有量は、野菜でもトップクラスである。また、ブロッコリーに含まれるスルフォラファンは、ポリフェノールの一種であり、体内に入った発がん性物質を解毒する酵素を活性化させる働きを持つ。

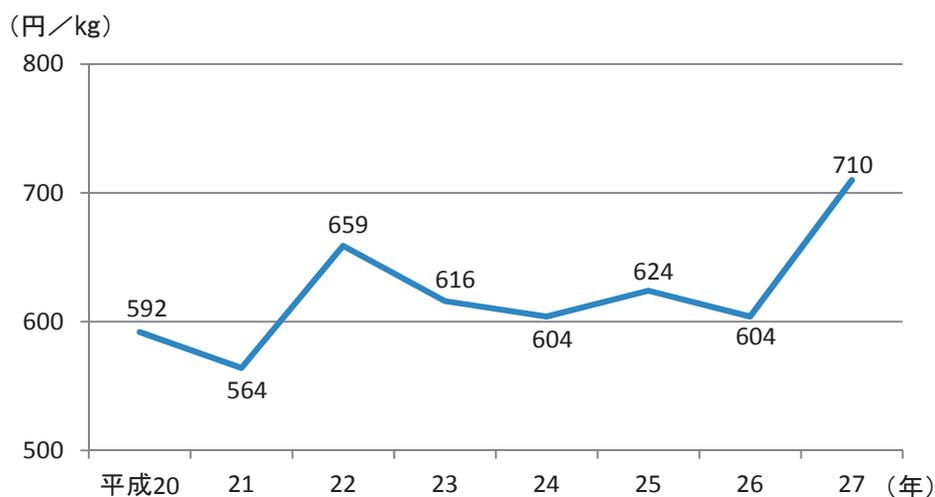
栄養価が高く、子どもや若者にも人気のあるブロッコリーは、幅広い年代におすすめの野菜である。

1人当たり年間購入量の推移



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：総務省「家計調査年報」）

小売価格（東京都区部）の動向



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：総務省「小売物価統計調査」）